

東奈良遺跡出土の高坏形土製品について

清水 邦彦・柴田 将幹

1. はじめに

東奈良遺跡はほぼ完全な形を保った石製の銅鐸鑄型をはじめ、数多くの鑄造関連遺物が出土している。これらの資料は500点を超える銅鐸の発見に比べ、限定的にしか見つからない弥生時代の鑄造関連遺物のなかでは群をぬく資料群である。

青銅器を鑄造するにあたっては、①製作する人（工人）、②生産に用いる道具類、③原材料、④製作する場所（工房）が必要となる。弥生時代の鑄造炉の確実な事例が佐賀県安永田遺跡などに限られる現状では、上記のうち考古学的な検討をおこないやすいのは②生産に用いる道具類である。そのため、東奈良遺跡の鑄造関連遺物は当時の青銅器鑄造技術や工人集団を考えるうえで極めて重要な資料群と言える。

生産に用いる道具としては、鑄型、送風管、高坏形土製品などがある。東奈良遺跡の鑄造関連遺物は、国指定重要文化財「摂津東奈良遺跡出土鋳範関係遺物」に指定されている銅鐸の石製鑄型36点、銅戈の土製鑄型3点、ガラス勾玉の土製鑄型4点、送風管143点のほか、ガラス小玉の土製鑄型、高坏形土製品、高坏形土製品の坏部内面に貼られていたと考えられる金属成分が付着した真土がある。

これらのうち、高坏形土製品は藤田三郎が鑄造関連遺物として見出して（藤田 1997）以降、その存在が認識された遺物である。そのため、東奈

良遺跡の高坏形土製品については、発掘調査が昭和48年（1973年）から49年（1974年）にかけてと古いこともあり、その存在は長らく知られていなかった。

しかし、調査担当者の一人である奥井哲秀が日常土器とは異なることから、埴埴もしくは取瓶ではないかと考えていた土器（図1）が近年、高坏形土製品として紹介された（北井 2012、清水 2013、奥井 2014）。さらに、その後も再整理を進めた結果、新たな高坏形土製品が存在することが明らかとなった。その成果については、平成29年秋に開催した第34回茨木市立文化財資料館テーマ展「銅鐸をつくった人々 - 東奈良遺跡の工人集団 -」で紹介し、東奈良遺跡では少なくとも3種以上の高坏形土製品が存在していたことが明らかとなった（清水 2017a）。

新修茨木市史で資料紹介された高坏形土製品（図1）は坏部と脚部の間に把手状のものがつくもので、口縁部の形状については不明である（奥井 2014）。本稿では、他の高坏形土製品について資料紹介をおこなうことで、東奈良遺跡の高坏形土製品の様相の把握に努めることを目的とする。

（清水）

2. 高坏形土製品の出土地点

本稿で紹介する高坏形土製品は2点である。これらの高坏形土製品の出土地点について、まず確認しておこう。

図2-2は前述した数多くの鑄造関連遺物が見つかった地点からの出土である。また、図2-1は大阪府教育委員会1976で台付鉢として紹介された資料であるが、再検討の結果、高坏形土製品とした。図2-1が出土した地点に隣接した調査区からの出土であり、東奈良24号銅鐸鑄型もこの調査区から出土している。

以上から、本稿で紹介する高坏形土製品はいずれも東奈良遺跡のなかでも、鑄造関連遺物が集中するエリアからの出土であることを確認できる。

（清水）

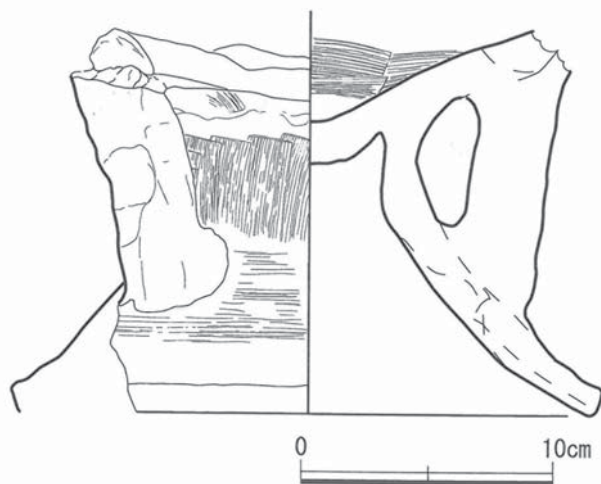


図1 東奈良遺跡出土 高坏形土製品（奥井 2014）

3. 高坏形土製品の概要

図2-1は口径10.5cm、残存高10.7cmである。内外面口縁部は時計回りのヨコナデ調整、外面坏部はタテハケ調整である。内面はヨコハケ調整後真土を貼り付けている。このヨコハケ調整は、接地面を増やすことで、真土を貼り付けやすくしたものと考えられる。口縁部に注口が一ヶ所設けられている。この注口を成形する際に、外側に粘土を貼り足している。このほかに、2個一對の凹みが4～5ヶ所施されている。この凹みの機能については類例がなく、不明と言わざるをえないが、送風管を載せるためのものであった可能性も考えられ、今後の課題としたい。また、この個体は内面・注口の反対側の口縁部の凹み・注口下部外面に被熱痕がみられる。外面口縁部直下に紐ずれ痕とみられる痕跡と、紐状の黒斑が観察することができることから、実際に使用された可能性が高い。

図2-2は口径を25.6cmに復元することができる個体で、残存高は9.3cmである。口縁部内外面はヨコナデ調整、坏部内外面はナデ調整が施されている。口縁部に注口が一ヶ所設けられている。注口の中央で2片に割れており、一方の破片の内

面には、割れ面に沿って被熱痕が確認できる。

(柴田)

4. おわりに

東奈良遺跡出土の高坏形土製品について、新たに見つかった個体について資料紹介をおこなった。最後にその特徴や今後の課題についてまとめておく。

まず、注ぎ口の形状や把手状のものがつく個体などから、東奈良遺跡では少なくとも3種以上の高坏形土製品が存在する。これらの違いが、時期差であるのか、鑄造する製品による違いなのか等について、今後の検討課題である。

また、大阪平野中部と奈良盆地の間では、高坏形土製品の注ぎ口の製作方法が異なるという難波洋三の研究(難波2009)がある。同じく道具である送風管でも、送風管内部の孔の形状、送風装置である轆との連結部分の形状に工人集団の違いが見出せる(清水2017b)。今後、近畿地域における工人集団を考えるためにも、製品である銅鐸、道具である送風管、高坏形土製品がどのように相關するのか、もしくはしないのかを検討していく必要があるだろう。これについては紙幅の都合上、

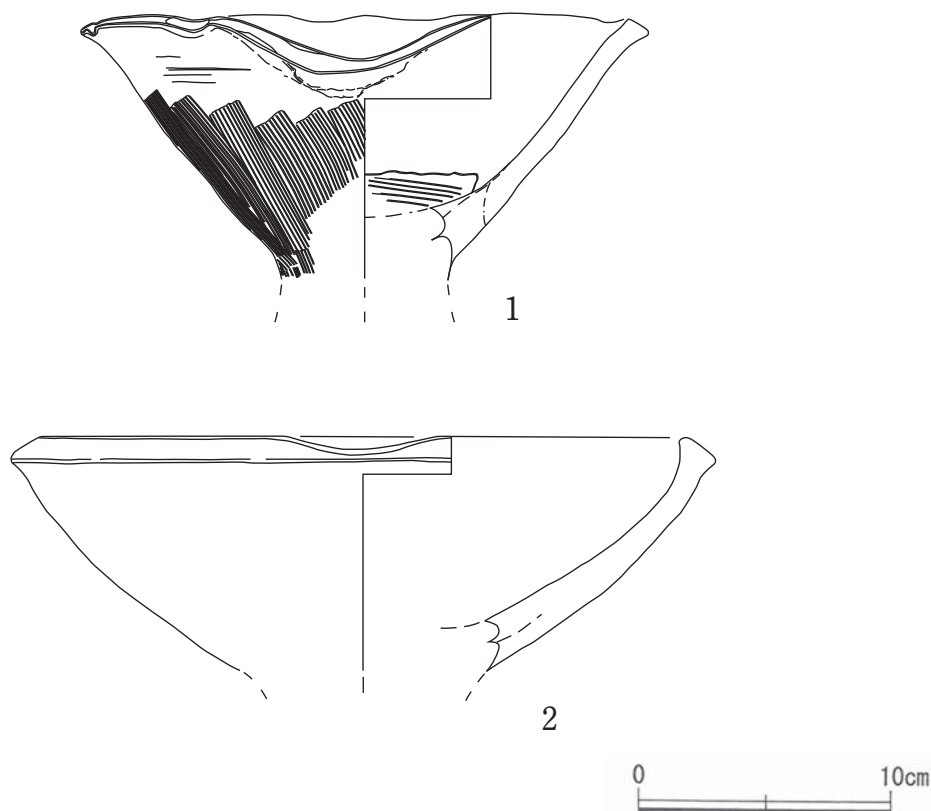


図2 東奈良遺跡出土 高坏形土製品

本稿では検討ができなかったため、別稿を用意している。

東奈良遺跡は多岐にわたる鑄造関連遺物が数多く出土したという点で奈良県唐古・鍵遺跡と並んで稀有であり、重要な事例である。今後も東奈良遺跡の鑄造関連遺物の紹介や検討を通じて、弥生時代鑄造技術や工人集団についての研究に資するよう努めていきたい。

(清水・柴田)

謝辞

高坏形土製品の認定にあたり、難波洋三氏、濱田延充氏、三好孝一氏、若林邦彦氏のご教示をえた。記して、謝意を表します。

参考文献（五十音順）

- 奥井哲秀 2014「東奈良遺跡」『新修茨木市史 第7巻 考古編』茨木市 pp. 112-183
- 大阪府教育委員会 1976『東奈良遺跡発掘調査概要 - 茨木市東奈良・沢良宜町所在 -』
- 北井利幸 2012「弥生時代の鎔銅技術 - 高坏状土製品の検討 -」『アジア鑄造技術史学会研究発表概要集』第6号 アジア鑄造技術史学会 pp. 85-86
- 清水邦彦 2017a『銅鐸をつくった人々 - 東奈良遺跡の工人集団 - 』茨木市立文化財資料館
- 清水邦彦 2017b「弥生時代鑄造技術と工人集団 - 近畿地域出土送風管の検討を中心に -」『日本考古学』第44号 日本考古学協会 pp. 27-45
- 難波洋三 1991「同范銅鐸2例」『辰馬考古資料館考古学研究紀要』2 辰馬考古資料館 pp. 57-109
- 難波洋三 2009「唐古・鍵遺跡で作られた銅鐸」『唐古・鍵遺跡 I』田原本町教育委員会 pp. 243-272